

加藤和徳氏を偲ぶ

副会長 荒木志伸

突然の悲報に接し、もう直接お目にかかれないう事実にとまどいました。思い出されるのは「荒木さん、こんなものがあるんですよ、みてください」と屈託なく石碑のお話をされる、加藤先生のほがらかな笑顔ばかりです。圧倒的な石碑への好奇心と調査への情熱は、同じ石碑を研究する者として、畏敬の念を抱くばかりでした。

一貫されていたのは、歴史研究家は目にとめないような路傍の信仰遺物を丁寧に過去の庶民の確かな痕跡が浮かび上がってくるのです。道路の整備等の開発で、いつの間にか消滅しまうことも多い石碑を地道に精査し、地域の歴史遺産にまで昇華させたことは、まさに加藤先生ならではの功績といえるでしょう。

山形大学の授業「石造文化と祈り(山形から考える)」でも、数年間 1 コマ分の講義を担当して頂きました。フィールドからそのまま登壇したような容貌やそのプロフィールから、最初、戸惑うような表情を見せる学生もいました。しかしながら、授業が進むと、徐々にその内容と情熱に引き込まれていくのです。真摯な研究姿勢は、若い人にもしっかりと伝わるのだなと実感しました。

教えて頂いた知識はもちろん、その熱意も受け継ぎ、私も石碑に直面し続けていきたいと思います。加藤先生、本当にありがとうございました。

加藤和徳氏一追悼

渡辺理絵(山形大学)

加藤さんと私は、今から 10 年ほど前に岩手大学大学院連合農学研究科に所属する学生とその副指導教員という立場で出会った。私の専攻は人文地理学であり、加藤さんの研究を知るまでは「板碑」について全く無知であった。私が加藤さんから研究報告を受ける機会は幾度もあり、くわえて加藤さんには既刊の著作が多くあったため、無知な私が「板碑」に関する最低限の知識を得るのはさほど難しくなかった。加藤さんの研究を知る中でもっとも驚いたことは、加藤さんが膨大な数の板碑を実地調査した点であった。たとえば山形県には 1,679 基があるが(加藤 2023, p. 14)、板碑一基ごとの情報が加藤さんの頭に刻まれていた。近年のデジタル化による研究環境の恩恵を享受している私にとって、加藤さんの研究手法と板碑に関する知は研究者としてのあるべき姿を示すよう